

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

うそか、ほんとか、やってみる。疑ってもよい。いちか、ばちかでもよい。

とにかく、やってみて、間違いないか、どうか。自分の眼で、自分の手足で、自分のからだで、しかと確かめる。

そして、確かにその通り、間違いなしと分かったら、素直にその事実を認め、さらに次の新しい段階に進んでいく。

これは、いわば科学的方法である。名づけて実験実証という。実際に験し、実際にこうだと証明するやり方である。純粹倫理の実践は、まさにこの実験実証を行なうことに他ならない。

ただ、やってみる。行なうということは、自分でやらなければ、実験にはならない。疑っていたので、やらなかった……では実証もできないのだ。

朝五時に起きようと心を決めると、本当に起きられる。四時にでも起きられる。そんなに早く起きられるものか、第一、目が覚めはしないと思う向きもあるかもしれないが、論より証拠やってみるのだ。疑ってもよいから、それはそれとして明朝は五時に起きようと、とにかく心をハッキリと決めることだ。疑ったままで、やらないのはダメである。実験にはならない。

個人的なことから、さらに離れて団体のこ

まずやってみよう

丸山竹秋



とになると、複雑さが加わって、難しいことも多くなる。しかし月の世界に飛んでいこうと決心し、何人が寄って実験をつみ重ねていくと、それもとうとうできるのである。会社やいろいろの団体で、目標を立てて、それを貫こうと本当に決心をすれば、案外簡単にできることもしばしばあるのである。

要するに実践とは科学的な実験実証のことなのだ。やってみて自ら確かめることなのだ。

ある人は、よしと気づいたことは、そのまま行なう。今日やるべしと気づいたことは明日や明後日にぐずぐず延ばさないといいことを徹底的にやってみた。もちろん今の一部の人がやっているように、ムチャなこと、乱暴なことも、思ったらすぐやってみまえというような、でたらめなやりかたではない。これを朝から晩まで一年も二年もずっと続けて「気づくと同時に行なってみた」その結果気づいたときが最良の好機で、このときがもっともよいときであり、しやすいときである。だから何事も気づいたときに実行する以上によい時期はないことが実証されたのである。

純粹倫理は、ことごとく、こうした科学的な実験実証の結果、間違いなしと打ち立てられたものばかりである。繰り返して言うように、私たちはこの倫理の一々を朝に晩に自分でやってみて、やり通し、その間違いのないことをいよいよ確かめ、生きていく喜びと信念をいよいよはっきりさせよう。それが同時に社会を健全化し、明朗化することにつながるのである。ここに到ると、実験とは実践と同じ意味になる。（『繁栄の法則』より）